

Contents

目次

第1部 総論

はじめに	1
幕張ベイタウン・コアのあゆみ	1
独自の幕張モデルを創出したコアの設計について 設計計画高谷時彦事務所 高谷時彦	2
小さな空間に多彩な演出上の仕掛け ホールの音響について 株式会社 永田音響設計 (担当: 福地智子、菰田基生)	3
幕張ベイタウン・コアのこれから 設計・計画 高谷時彦事務所 青木 徹	5
「ふれあいの中から未来が見える」 下川正晴 (5番街、コミュニティコア研究会)	5
コンサートピアノを求めて 隅山 雄介 (グランパティオス公園西の街、 ピアノ選定委員会事務局長)	11

第2部 私の思い

計画設計調整者の立場から 土田旭 (都市環境研究所)	13
「幕張ベイタウン・コア」開館に寄せて 尾辻信宣 (元都市環境研究所、 現 Glocal Vision 代表、福岡県在住)	14
それぞれの知恵の結集 千賀 坦 (当時・企業庁地域整備部幕張新都心建設課課長補佐、 現在・企業庁地域整備部内陸建設課副課長)	15

住民参加でつくりあげたすばらしい施設 篠原重雄（当時・千葉市企画調整局政策調整課長、 現在・千葉市国際交流協会常務理事兼事務局長）	15
苦労して育てた我が子を嫁にやる親の気持ちです 加藤忠雄（千葉県企業庁地域整備部事業管理課主幹）	15
登庁前からコアの会議に参加した 津村政明（千葉県企業庁地域整備部事業管理課副主幹）	16
コアは「モモ」である 中山勝司（当時・千葉市企画調整局政策調整課主査） 現在・千葉市経済農政局農政部農政課補佐	16
趣味と人脈を広げられる新しい発見の場に！ 北村直子（パティオス 21 番街、 tecchan@aa.e-mansion.com）	17
さあ！ 今からベイタウン・コアを造りましょう 上杉敬郎（パティオス 16 番街、コアの設計図を初めて提出。現在・ ローズベイハーツ経営者）	17
子ども達が自慢できるコアに 井上 広恵（わくわくおはなし会）	18
私のしたかったことを、この街でやってみよう！ 青木幸子（ミラリオ、ベイタウンシネマクラブ会員）	18
「好き」だという力を目に見える形に 青木尚子（ミラリオ、ベイタウンシネマクラブ会員）	19
ふれあい、うるおい、ぬくもりを 松浦大造（グランパティオス公園西の街、 子どもルーム父母会）	20
想像を越えた可能性を秘めている 浪岡尊志 （千葉市若葉区、コア・ホールの基本コンセプトを作成）	20
笑顔でこんにちは 犬井千年（パティオス 4 番街）	21
未だ見ぬ子へ 内田康文（パティオス 4 番街、前自治会連合会長）	21
誰にでも居場所となるように 大竹 亮（元・パティオス 13 番街在住、 元まちづくり研究会、現在は福岡市在住）	22

図書館分館のお手伝いと気の早い話 村岡英裕（グランパティオス公園東の街、 まちづくり研究会）	22
コアは住民自治のシンボルだ 松村守康（パティオス10番街、 ベイタウンニュース、寺子屋）	23
音響重視の多目的ホール？！ 今川大介（グランパティオス公園西の街、 ベイタウン中年バンド。コアホールの音響整備に尽力）	24
コアでまちにデビューした 茂木俊輔（パティオス7番街、コア建築研究会、 ベイタウンニュースほか）	24
その名の通りに住民同士の活動拠点に 岩崎喜久子（セントラル・パーク・ウエスト、 図書館を考える会）	25
コア開館バンザイ 小畑幸保（パティオス10番街、自治会連合会会計担当）	25
<縁>が産まれる場所 下田路晴（公園東の街在住 コア開館イベントポスターデザイン ベイタウンシネマクラブ代表）	25
幕張ベイタウンの我が家 大屋道夫（パティオス11番街、コア建築研究会）	25
第3部	
資料編	
1990	28
1991	28
1995	28
1996	29
1997	29
1998	31
1999	31
2000	32
2001	34
2002	35
市長選立候補者への質問	37

千葉市長および教育長への要望書	41
ピアノ設置のための住民への協力要請	43
幕張ベイタウン・コア開館イベント写真集	45

Baytown Core

第 1 部 総論

はじめに

幕張ベイタウン・コアは住民が基本構想の設計段階から関わりながら千葉県企業庁により建築されました。また、管理・運営は千葉市によりますが、住民の運営への参加が積極的に行われています。

公民館、図書館、子供ルーム、専用音楽ホール並みの多目的ホールからなる千葉市で初めての複合施設であり、住民自身が行政と共に運営を模索し新時代の「生涯学習」を実現する、ユニークな施設です。

幕張ベイタウン・コアのあゆみ

千葉県企業庁により幕張ベイタウン・マスタープラン策定「街の中心に位置する、コミュニティの中核施設<コミュニティコア>」「文化・芸術のための500人ホール、美術館、プチホテル併設施設」

1995年	幕張ベイタウン誕生
1997年春	住民によるコミュニティコア研究会発足
1997年秋	コミュニティコア事業化研究会スタート（企業庁、市役所、住民、ビジネス街ほかによる研究会） 「早期施設と将来施設の分離建設の方針を確認」
1998年春	事業化研究会まとめ バブル構想が崩壊し、一転最小限の施設へ 「早期施設として公民館、図書館、郵便局、『多目的スペース』を建設する」
1998年～99年	企業庁、施設管理の方法を模索 企業庁と市役所の管理問題をめぐる折衝 A案：企業庁が建築し、千葉市公民館などは店子として入居 B案：企業庁が建築し、その後の建物管理は市役所が行う → 1年間の協議の末B案で決着
1999年秋	基本計画検討会スタート 郵便局は施設外へ（プロムナー

- ド沿いの店舗へ、2002年春現在、未開局)、子供ルーム入居
- 2000年春 基本計画検討会まとめ
「施設面積1950平方メートル、コア運営を住民参加も含めて検討する」
「小粒でもキラリと光る、音響にもこだわった多目的ホール」
コア設計：『設計・計画高谷時彦事務所』
ホール音響設計：『永田音響設計』
- 2000年3～6月 基本設計
施設面積1988平方メートルが決定
- 2000年6月 備品は市役所の予算で整備するとの方針決定。ピアノは公民館の標準備品であるアップライトの方針
- 2000年11月 ピアノ購入のための「チャリティ・コンサート」 ホテル・フランクスにて
- 2000年12月 ピアノ購入のためのチャリティ「第1回ピアノ発表会」 幕張総合高校講堂にて
- 2001年3月 建築工事着工
- 2001年7月 市側はピアノはアップライトを撤回。
- 2001年11月 施設愛称決定 『幕張ベイトウン・コア』
- 2001年12月 ピアノ購入のための「幕張ベイトウン チャリティ・クリスマスコンサート'01」 神田外語大学ミレニアムハウスにて
- 2002年1月 竣工
- 2002年3月23日 公民館・多目的ホール・図書館分館・子供ルームの複合施設「幕張ベイトウン・コア」開館

独自の幕張モデルを創出したコアの設計について

設計計画高谷時彦事務所 高谷時彦

幕張ベイトウン・コア(以下コア)は公民館、図書館分館、子供ルームの3施設(ゾーン)とそれらをつなぐアトリウムやコミュニティギャラリーなどのパブリックゾーンから構成されています。

■ホールを中心とする公民館ゾーン

ベイトウンの目抜き通りであるプロムナードに、タイルと打ち放しコンクリートで出来た大きなボリュームが顔を出しています。この中に、公民館あるいはコア全体のシンボルともいえるホールが入っています。「小さくともきらりと光るベイトウン独自の施設」をつくろうという声に答えるべく、クラシック専用ホールにも匹敵する良い響きと雰囲気を持ち、同時に拡声装置を使ったときにも十分な性能が出る多目的な空間づくりを目指しました。



完成したベイトウン・コア
1階アトリウムより子どもルーム、図書館を望む

形態的にはオーソドックスな直方体（シューボックス型）ではなく、平面を六角形とし、また壁を、上方にいくに従い内側に傾けました。これにより凝縮感、求心力のある空間を生み出し、ホールにいる人が音と空間に、一体的に包み込まれるような雰囲気を作ろうとしました。経験豊かな永田音響設計の専門的なアドバイス、指導により建築音響的にも期待に答えるものが出来たと思います。またカーテンを舞台正面と側面に廻すことで拡声装置の使用時にも十分対応できるものになっています。

ホールを囲むように工芸室、調理室他の公民館諸室が並びます。このうち講習室や和室はホールの控え室、楽屋としても使えるようになっています。

■静かで眺めの良い図書館ゾーン

図書館は四分の一円の平面形をしています。ブラウジングコーナーなどのある円弧部分が中庭に面し、また東側の開架書庫ゾーンもアクアダクトパークに面しているのが図書館全体が公園の中にあるような雰囲気となっています。緑豊かな外部環境との一体感が得られるように明るく天井の高い一室空間としましたが、騒音等に配慮し幼児、児童のゾーンは緩やかに区画しています。天井が高いため照明設備には工夫をしています。先ほどのホールもそうですが天井高さや室形状などはある意味では贅沢なものになっていますが、仕上げの材料などは決して高価なものではありません。ここではレースウェイという、本来は機械室等で使う照明システムの活用を試みています。

■外部に連続した子供ルームゾーン

子供ルームは、中庭に面したゾーンに、大地に接するように配置しました。独立した出入口をもち、単独で使用できるようになっています。子供の活動が外にも広がるよう、また父兄の立ち話スペースにもなるよう半戸外のピロティを周囲に廻らせました。ピロティは中庭からコミュニティセンターガーデンへとそのまま連なっています。

■アトリウム、コアギャラリー等の多目的なパブリックゾーン

アトリウムは自由に人が集まれる街の居間です。キッ

チンカウンターが置かれ、気軽にお茶が飲めるようになっています。また時には隣のコアギャラリーや外部のテラスと一体的にサロンコンサートやイベントの会場としても使われます。

コアにはこのように自由に使える場所を内部、外部を問わず多く用意しました。中庭もそのひとつですが、ここでは中庭を介してお互いに活動する様子が垣間見えるような開放的な空間づくりを行いました。子供ルームの子供たちと工芸室で工作に奮闘するお年寄りたちの中庭を挟んでの交流を図書館のブラウジングコーナーでくつろぎながら眺めてみたい…など勝手な想像を膨らませています。

* * *

しかし、これからこのコアで展開される活動は、そんな私の想像や、既成の枠組みを遥かに越えた広がりや可能性をもったものになるのに違いありません。そのことはこの3年間に渡り、私が感じ続けた住民の皆さんの創造的なパワーとエネルギーが物語っています。また基本構想以来、住民と企業庁、市役所等関係者が協力しながらたどってきた道は今後の公共建築の計画手法の新しい方向性を示しているように思います。本来公共建築とは住民の望み、願いが原点に来るべきものです。決してスタンダードのあるものではないことは、ここでうまれた独自の幕張モデルが示しています。私たちもそのモデル形成の一翼を担えたことを誇りに思っています。

最後になりましたが、設計の機会を与えてくれただけでなく都市デザインの観点から指導を戴いた土田旭先生や企業庁の皆様へ感謝するとともに、短い工期の中で私たちのデザイン上の「こだわり」にもとことん付き合ってくれた現場の多くの人たちの、まさに手作りの作品がコアであることを御報告して筆を置きたいと思えます。

小さな空間に多彩な演出上の仕掛け

ホールの音響について
株式会社 永田音響設計（担当：福地智子、菰田基生）

「集会所」から「ホール」へと最終的には名称が変更されたが、建設計画当初から、この空間にはホールとしての大きな期待が寄せられていた。ピアノのコン

サートやバンド演奏など、使い方に関するさまざまな要望が住民側から提出され、議論が重ねられていたのである。

音響上、これらの要望に応えられるように工夫した点は以下の通りである。

まず、ピアノなどの生音のコンサートにはある程度の響きが必要となるため、天井をできる限り高く取り、空間の響きに余裕を持たせるようにした。エコーなどの障害が出ないように室形や内装条件を考慮した結果、気持ちの良い響きが得られた。椅子が設置されていない空室状態における残響時間は約1.3秒(500Hz)であり、椅子を設置して満席状態となった場合の残響時間を推定計算すると、ピアノ等のコンサートに適した1秒前後(500Hz)になると予想される。

次に、講演会やバンド演奏など、比較的響きが少ないほうが好ましい場合のために、ホール正面の壁と側壁にはカーテンが設置できるようにして、響きの長さ

を調整できるようにした。両方を使うと、残響時間は約0.2秒短くなる。

音響設備には、スピーチ用の拡声設備と、簡単なバンド演奏程度は十分に再生できる移動型スピーカのシステムを用意した。舞台機構としては、電動の昇降ステージを設置し、さらにステージを広げたい場合のために、普段は折り畳んで収納できる仮設ステージも用意している。ステージ正面には前述の幕や看板などが吊り下げられるような昇降三角バトンを、またステージ上と客席中央上部には演出照明用の昇降バトンを設置しており、照明器具については、バトンに吊り下げるもののほかに、スタンド付きのフォロースポットも用意している。

以上のように、小さな空間ではあるが、演出上の仕掛けがいろいろとできるようにしたこのホールが、今後、住民に末永く愛されていくことを願っている。



建設工事中に壁面に描かれたベイトウン・コアのイメージ図

幕張ベイタウン・コアのこれから

設計・計画 高谷時彦事務所 青木 徹

幕張ベイタウン・コアは、まわりの別の行動を互いに意識できるというコンセプトをもっています。この意識すると言う点は、この施設をつくる過程でもみることができました。

公共施設において、エンドユーザーである近隣住民の皆様の意見を直に伺いながらの計画は画期的であったと思います。「良いものをつくってほしい、こういう施設を望んでいる」という高い意識を持ちながら、事業主である企業庁と接しておられ、そのおかげで、企業庁や千葉市は設計当初の段階から要望を常に意識して、限られた予算の中で工夫をしながら計画に取り組んでおりました。

さらに、施工者である新日本建設の監督員の意識は大変高く、「造るからにはいいものを造りたい」という職人魂には感激をしております。例えば、この施設は打ち放しが多く、施工業者の良し悪しが表に出てしまいますが、見て頂ければわかるように、とても美しく仕上がっています。

このように、つくる事に携った人々が、常に高い意識を持ち続けて箱が出来上がりました。これからは、高い意識をもたれた近隣住民の皆様が使っていく訳ですから、この箱は「幕張ベイタウン・コア」という全国に例を見ないすばらしい施設になると信じて疑いません。

「ふれあいの中から未来が見える」

下川正晴 (5 番街、コミュニティコア研究会)

コア発見の旅

タウン紙「ベイタウン・ニュース」のインタビュー企画「Who's Who」は、毎回、ベイタウン関係者を取り上げている。2002年3月1日号には、コアの設計者・高谷時彦さんが紹介されていた。

「設計とは設計者のイメージを図面に表現する作業だが、それは『発明』ではなく、使う人たちの考え方や目的・用途などのいろいろな事の積み重ねによる

『発見』である」と考える。その方法論として、面積や街並み、スペースと品質、使い勝手の整合性を住民との話し合いの中で解決しようとした」

この文章を読みながら、僕は高谷さんが「幕張ベイタウン・コア」という素晴らしい建物を完成させた秘訣が分かったような気がした。僕にとって高谷さんのイメージは、住民の意見を我慢強く聞き入れ、頭をぼりぼりかきながら、やがて「分かりました。やってみましょう」と決然と答える姿である。高谷さんらしい優しさと明るさにあふれたコアが誕生したことに、心から感謝したい。

コア研がスタートして間もないころ、映画のタイトルをもじって「2001年コアの旅！」と書いたことがある。コアは当初2001年完工予定だった。「遙かな旅だなあ」と思っていた。

いまコア開館を控えて約5年間の足取りを振り返ると、それは「コア発見の旅」であり、「ベイタウン発見の旅」だった、としみじみと言える。多くの人々の熱意と力、ふれあいの総和として、コアは開館するのだと僕は思っている。

結集力、多彩、スピード

手元に1枚の名簿がある。そこには1997年3月20日、パティオス1番街集会所に集まった人たちの名前が書いてある。全部で21人。この中には、5年後のいま、転居された方もおられる。参加者の自宅電話の局番がすべて「211」であるのが、新しい街であることを実感させる。

この会議では、千葉県企業庁が計画している「コミュニティ・コア」について、さまざまな要望が出た。「学童保育クラブを」「コアの建設を急いで欲しい」「テニスコートを」「家庭菜園を」「便利な図書館を」「高齢者のことを考えた街づくり」を……。会議は、企業庁主催の「コミュニティコア事業化研究会」に代表3人(岩瀬英一郎、海下英子、下川正晴)を出すと同時に、住民の意見を集約するために「コミュニティ・コア研究会」を作ることを決めた。だから、この日がコア研第1回会議になった。コアをめぐる住民の取り組みのスタートである。

福永幸生さん(10番街)が記録された「ベイタウン・コアの歩み」=資料編に収載=に従って、コア研の草

創期を振り返っててみよう。

- 4月13日 コア研第2回例会（36人、ゲストは企業庁・加藤副主幹ら3人）
- 4月30日 「この指とまれ」を全戸に配布。
- 5月11日 コア研第3回例会（約50人、ゲストは下村幕張メッセ専務）
- 5月17日 コア建築研究会初会合
- 5月20日 幕張ベイタウンニュース創刊
- 5月25日 コア研第1回運営委員会
- 5月25日 「ベイタウンに子どもルーム建設を目指す会」第1回全体会議

これから分かるのは、住民たちの結集力の強さ、活動の多彩さ、そしてスピードである。よくも、これだけのことが短期間に出来たものだと思う。これは現在まで続く「ベイタウンの住民活動」の一大特徴でもある。

なぜ、それが可能だったのか？。コア研の第1回会合にも参加した松村守康さん（10番街）は、こう振り返る。

「いままでの公民館とはちがったものをつくりた

い。新しいコミュニティコアの設計にぜひ住民の声を。この呼びかけが企業庁から出されたとき、自治組織の設立に奔走していたメンバーは驚いた。行政が自分たちで作る建物に住民の声を反映させようとしている。やはり、この街には他の街にはない新しい手法が可能なのではないか」

ベイタウン創設の精神は、さらに「ベイタウン物語」を読めばよく分かる。街作りに関与した都市デザイナー、建築家、そして1～6番街住民の文集である。コアの図書館分館入り口の一番目立つところに置いてある。この本には新しい街を作ろうという意欲とアイデアがあふれている。僕も大きな刺激を受けた。

初めに規模縮小ありき

県企業庁主催の「幕張ベイタウンコミュニティコア事業化研究会」の第1回会合は、97年7月28日になって、ようやく開催された。根回しに企業庁は苦勞したらしい。

事業化研究会開催の1週間前。いかにもベイタウンらしい催しが開かれている。街のプロ音楽家である



打瀬中多目的ホールを活用したベイタウン・ファミリーコンサート（97年12月21日）

御木まどかさん（5番街）と安藤歩さん（3番街）をフィーチャーした「バイオリンとワインの夕べ」（5番街コミュニティ主催）だ。集会室のドアをはずしてグランドピアノを搬入し、中庭にイスを並べて客席にし、工事現場の大型ライトを持ちこみ、舞台代わりの集会室を照らし出した。夕暮れの中庭に約150人の地域住民が詰めかけた。初夏の夜空にバイオリンの音が流れた。ベイトウン3年目の記念すべきイベントになった。

このような音楽企画は、打瀬中多目的ホールを活用したベイトウン・ファミリーコンサート（97年12月21日）など、さまざまな小規模音楽会へと発展した。その後、コアのホールの性格付けをめぐる「音響重視の多目的ホール」案が、大きな反対もなく採択されたのは、こんな活動の積み重ねと実績があったからだ。コアの建設は「初めにソフト（住民活動）ありき」であった。これは、ベイトウンの大きな特徴だ。

2000年8月5日に開かれた「コアのホールを考える会」で報告された福永幸生レポートによると、それ以前の5年間、ベイトウンで行われたイベントのうち、自然楽器の演奏は20%、電子楽器の演奏13%、その他の音楽ジャンル6%、映像上映2%、演劇4%、演芸2%、講演会・会議など45%、軽運動2%、展示会6%だったのである。

さて、ようやく始まった企業庁主催の「事業化研究会」は、規模縮小の合意を取り付けるための場だったと言ってよい。僕たちが入手した資料によると、コアをめぐる企業庁の当初構想は「建設費170億円」（1990年）「建設費約200億円と推測」（91年、その後公表せず）というどてつもないものだった。それがバブル崩壊によって、文字通り、海の藻屑と消えていったのだ。

朝日新聞（2002年3月7日夕刊）は「企業庁は規模を縮小するにあたって、どんな機能を優先するか意見を聞こうと、住民代表を会議に加えた」と書いている。それは確かに「初めに規模縮小ありき」の会議だった。第1回会議からの出席者であった僕の実感でもある。

千葉市役所を代表して会議に参加した篠原重雄・千葉市企画調整局政策調整課長（当時）は、こう振り返る。

『「行政は、のんびり、何をやっているんですか！』『こんなことでは、いつになったら具体的な議論ができるか、見当がつかない』。ベイトウン住民代表の発言に、居合わせた千葉県企業庁、千葉市役所の関係者に緊張した雰囲気が漂う・・・』

僕たち住民代表3人には、確かにこう形容されるほどのイラ立ちがあったに違いない。

やる気をなくした

会議には住民代表3人のほかに、新都心の街づくり協議会事務局長、千葉市企画調整局調整課長、三井不動産千葉支店長、千葉県国際文化課長らが出席していた。メンバーからは表立った縮小反対意見はなかった（と記憶している）。事前に根回しは終わっていた、ということなのだろう。

コア研は98年4月11日、「事業化研究会」のまとめを報告する集会を開いた。報告内容は「コアの早期施設として、住民の基本的なニーズに対応した多目的スペース、公民館、図書館、郵便局を開設する」というものだった。

この報告会を機に、コア研は停滞期に入る。なぜか。コアをめぐる論争の埒外に置かれたからだ。企業庁と千葉市は98年から99年の1年間をかけて、施設管理の問題をめぐる折衝を続けた。「A案：企業庁が建築し、千葉市公民館などは店子として入居する」「B案：企業庁が建築し、その後の建物管理は市役所が行う」。結局、すったもんだの末、両者の交渉はB案で決着した。「公民館や図書館などが中心の施設なんだから、B案でいいんじゃないか」という企業庁側の理屈が通った。1年間が無為に過ぎる中で、僕もすっかりやる気をなくしていた。

やわらかな頭脳集団

99年5月1日のベイトウン・ニュースは「コミュニティコア建設、無期限凍結か」というショッキングなタイトルの記事を掲載した。設計のための予算が確保できなかったこと、企業庁の収支悪化が原因であること、関係施設のテナント入居方式から入居先が維持・管理の費用を全て負担する分譲方式に変換しようとしていること、を列記した。

さらに同年10月1日の同ニュースは「建設先送り・

うわさの真相」取材記事を掲載した。同紙の記者である金一剛さん（3番街）や茂木俊輔さん（7番街）らの危機感がよく反映していた。

茂木さんらは同年5月のベイトウン祭りで「コア研有志企画」として、高校生によるディベート対決「24時間営業の店舗は必要だ!？」を行った。高校生は反対派、大人は賛成派に分かれての模擬討論である。ベイトウンでは、24時間営業のファミリーレストランの開業が挫折したばかりであった。この討論は、ベイトウンデザイン会議の蓑原敬先生（賛成論）も飛び入りで発言するなど、なかなか面白かった。

茂木さんらコア研有志は、翌年のベイトウン祭りでも「ベイトウン生き物マップ」を製作して、やわらかな頭脳集団ぶりを発揮した。これに先立ち4月には、ベイトウンネットの「バーチャル会議室」でコアに関する書き込みが始まった。現実面での沈滞現象が続く中で、模擬討論やバーチャルでのやりとりがコア研再生を準備したのだ、と僕は評価したい。

コア研の活動を進めるに当たって、きわめて重視した2大原則がある。それは「情報の共有化」「公開的

な討論」の2つである。ニューカマーばかりで構成される新しい街で腹藏のない議論を交わすには、特定の集団や個人に情報が集積する現象は厳に戒めるべきだ。これは新聞記者を職業とする僕にとって、自明の大原則だった。

そして「公開的な討論」。コア研の集会には、誰でも参加できるようにした。集会開催を知らせるポスター掲示のために「メディア担当」を、早々に各番街に作ったのも、この「情報共有」「公開討論」原則を重視したからだ。

2002年3月8日の朝日新聞（首都圏版）は、コア研の活動をめぐって「ネットは大きな武器だった」と書いた。確かにネットの普及で情報の伝達は多いに促進された。しかし、いまの課題は、非ネット住民？との情報格差をどう埋めて行くかということだろう。これは手間と人手がかかる。ベイトウンが狭い街だった草創期には、僕もピラを配達して回った。しかし、すでに人口1万人を超え、マンションが林立するようになってはそうもいかない。なかなか頭の痛い問題なのだ。



コア研究会の様（99年4月11日）

建築家・高谷時彦

99年9月5日、5番街集会室で「コアを考えるつどい」が開かれた。この時から。コア建設は本格軌道に乗る。福永さんの詳細な会議録掲載がネットで始まったのも、この時からだ。

”福永年表”に「コアを考えるつどい」はこう記録されている。「ゲストは都市環境研究所の尾辻信宣さん。2001年、第1次コアの完成を目指し、本格的な動きが始まる。建設は千葉県企業庁、施設管理は千葉市が担当。きょうの集会はベイトウン住民の声を再結集することがねらいだ」。確かにそういうことだった。

この時期に活躍したのが、コア建築研究会のメンバーたちだった。ベイトウンに居住する一級建築士や建築雑誌記者らで構成されていた。論議を2、3回続けると、「ともかく絵を描いて見ませんか」。そんな声はどこからともなく上がった。そして、最初にお目見えたのが上杉敬郎さん（16番街）の作品だった。当時、上杉さんは大手ゼネコンの設計セクションの社員だったが、ベイトウン内でお店を開くことを考えていた（その後、CPWに「ローズベイハーツ」を開業した）。

この上杉作品を、僕たち住民代表（松村守康、茂木俊輔、下川正晴に交代していた）は早速、企業庁や市役所、コンサルタントとの第1回「コア整備検討会」（99年10月26日）の場に持ち込んだ。

第2回目の検討会が開かれた時、上杉私案はなかなかの評判だった。行政関係者からも「アトリウムを公民館、図書館、多目的スペースの連結役にするアイデアは悪くない」。そんな感想が聞かれた。「先手必勝だな！」。僕らは、してやったりの心境だった。

この後、コア研は定期的な研究集会を活発化させた。コアを考える報告会（99年11月2日）▽コア運営委員会（同11月28日）▽コミュニティ・コアフォーラム（同12月19日）▽コア拡大運営委員会（2000年1月9日）などなど、集会名を変えながら、住民の関心を引き起こそうと努めた。

2000年4月2日には「設計者と語る会」が開かれた。コア設計者に高谷時彦さんが選定され、初めての住民との対話集会が行われたのだ。「コアは住民が寄りあっているいろいろなことを行う場である。最低限必要なものだけでなく、プラスアルファを求めたい。ステージ

の上に上がった時の高揚感など、ふだんと少し違うハレの場をイメージしている」。高谷さんが語る抱負は、僕らが抱いてきたコアへの期待感とあまり違いはなかった。

「腰の低い先生」。その第一印象は今も変わらない。しかし、それが単に高谷さんの個性であるだけでなく、建築家としての理念が背景にあるのは、最近になって分かった。

人材が続々登場

この時期の焦点は、「住民のさまざまな要求をどう建築家への要望項目として具体化するか」という問題だった。しかし、それはスムーズに解決された。各分野の専門家がベイトウンに居住しており、その人たちがコア研の会合に参加して、「こうしたらどうでしょうか？」と積極的に発言し、活動し始めたからだ。

コアの建設は多くの住民の数限りない知恵と熱意に支えられてきた。その代表的なメンバーの幾人かが、この「コアと私」に文章を寄せている。「音響重視のホール」の基本コンセプトを提示した交響楽団ステージマネージャーの浪岡尊志さん（当時9番街）、音響システムを構築した今川大介さん（GPW）、コアのピアノ選定に尽力している隅山雄介さん（GPW）たちである。コア研に参加した動機、思いは各文章に端的に表現されている。

少しだけ補足すると、浪岡さんは千葉県内のホールを隈なく回った経験から、「200人規模のいいホールが少ない。ベイトウンにはそれが必要だ」という提言を行った。きわめて実践的で説得力のある提言だった。このコンセプトは「小さくてもキラリと光るホール」という卓抜なコピーに発展した。

今川さんは「音楽専用か？、多目的か？」という曖昧さを鋭く指摘した。コア研会議での発言のシャープさに驚いて電話すると、音響会社の社員だと分かった。「ウインドサーフィンがやりたくて、この街に引っ越してきたんですわ」。関西弁が和やかだった。すぐに音響システム作りの中核メンバーになってくれた。

隅山さんは、メールでピアノの選定について問い合わせてきた。東京の名門私立中高校の生物講師。独身。首都圏のホール規模、ピアノの種類、価格などを調べ

上げ、詳細なデータとしてまとめてくれた。「コアのハードとマッチしたピアノ選定」「住民に納得してもらえる公開的なピアノ選定」。このスタンスを当初から堅持した。隅山さんはポスター、ホームページ作りでも非凡な才能を発揮した。

僕はこの頃から、コア作りというのは「21世紀の初め、千葉市の埋立地に集まった住民たちが織り成す、夢と意欲の結晶体である」と、強く自覚するようになっていた。

人の縁が街を作る

コア開館イベントのポスターを製作した下田路晴さん（公園東の街在住 ベイタウンシネマクラブ代表）は、大手広告代理店のアートディレクターだ。高校入試に失敗した下田少年は、幕張の海を見ながら再起を誓う。20年後、ベイタウンの住民になった下田さんは、この街との〈縁〉を感じ、「この街でもう一度やってみるか」と、活動に参加するようになった。僕はこんな印象深い物語がベイタウン住民のそれぞれに秘められているのではないかと直感している。

「海を埋めてて作られたヨーロッパ風の砂上の楼閣」。ベイタウンを酷評すれば、それが実態だといわれても、まだ反論できないだろう。幕張で生まれ、幕張の海で育った作家・椎名誠氏あたりは、そう思っているのではないか？。彼の作品を読むたびに僕はそう思う。だから、200年、300年後にも恥ずかしくない街を作ろう、頑張ろうじゃないか！、と皆さんに強調してきた。

「幕張ベイタウン・コア」という愛称を決める時には、「幕張」は要らないのじゃないか」という声があった。僕は「絶対に、幕張」をいれるべきだ」と踏ん張った。遠浅の干潟であった「幕張の海」をつぶして生まれた街だからである。土地に歴史は息づく。「温故知新」。伝統継承の中に、21世紀の新たな発展があるからだ。

「建物で街を作る」という言葉がベイタウンにはある。パティス（中庭）を特徴とする各番街の個性に彩られた街作りを指して、主に建築関係者が用いてきた言葉だ。僕は、これは半分の真実しか語っていない、と思う。やはり「街は人々の営みで作られる」からだ。「人と人のネットワークで街は形成される」からだ。

「建物で街を作る」「人と人のネットワークで街は形成される」。この2つが結合したのが、コア建設の過程だった。住民と行政、設計者が力を合わせたコアの建設は、21世紀型の街作りを目指すひとつの試行だった。

住民、行政、設計者

住民と行政と設計者の協力関係が、住民要望を基礎にしたコア建設のカギだった。コア研の主催による集会は、土曜日の午前中、毎回20人〜30人の参加を得て行われた。行政、設計の担当者は交代交代で出席した。

「コアの完成は、休日返上、深夜の討議、関係者の皆さんの協力と理解があつての賜物です」（千賀 坦さん＝当時・企業庁地域整備部幕張新都心建設課課長補佐、現在・企業庁地域整備部内陸建設課副課長）。この思いはコア建設に携わった我々全員のものだ。

「幕張ベイタウン・コアは（中略）常に神経を張り詰めなければならぬ仕事でした」と加藤忠雄・千葉県企業庁地域整備部事業管理課主幹。「コアとの出会いは、なんと企業庁への赴任が決まったが、まだ登庁していない平成12年4月2日の日曜日でした」と、建設実務を担当した津村政明・千葉県企業庁地域整備部事業管理課副主幹は述懐する。

基本計画作りに奔走した千葉市企画調整局政策調整課主査の担当者・中山勝司さん（現在、農政課課長補佐）は、日曜日になるときまって僕の家に見え、熱心にコア建設をめぐる問題点と打開策を話し合った。

図書館に置く本についても村岡英裕さん（GPE）ら図書館研究会が要望書を提出した。企業庁は幕張新都心関連の書物、レポートなどを倉庫から「発掘」し、コアの図書館で閲覧できるようにした。これも3者協力の賜物だ。

ベイタウン・コアの建設をめぐるっては、とかくマスコミでは「住民参加」「住民主導」の面ばかりが目される。しかし、実際には住民、行政、設計者がそれぞれの長所を発揮し、協力しあつた（時には大喧嘩をしながら！）のが実態だ。この点は当事者の1人として強調しておきたいポイントである。

コア研の運動は1900年代後半に顕著だった「行政との対立型運動」「行政への要求型運動」とは無縁の

ものだ。住民が創意をこらし、行政は知恵をめぐらせ、設計者はみんなの夢を形あるものにしてきた。それを実現できたのが、コア建設に関わったものたちの誇りなのだ。

「公」を「民」が作る時代

ハード（建物）は完成した。これからはソフト（心）が大事だ。しかし、これには自信がある、と僕は宣言しておきたい。住民の夢と心があったからこそ、5年にわたるコア研究・建設の中で、自由かつ広範囲な住民ネットワークが形成されたからだ。それがコア建設の原動力になってきたからだ。

ベイトウンを隔週火曜日に訪れていた移動図書館の図書貸出率は、千葉市で1、2位を争うほど高いものだった。移動図書館の奉仕員として活躍した女性たちは、いま図書館分館のパートタイマーとして働いている。

3月23日から始まった3週間の「コア開館記念イベント」の多彩さと水準の高さ、それを住民の手作りで実現してしまうチームワークのよさは、驚嘆するばかりだ。ソフト面でも、私たちは新しい展開をお見せできるだろう。

「公民館」というのは手垢のついた言葉だ。マイナスイメージが付きまとう言葉でもある。しかし、僕はいま「公民館」という言葉を、「公のために民が作る館」なのだと思うようになった。「公」（パブリック）の概念は、近代日本社会の中で根付かず、暴発と拡散を続けてきた。いま、あらためて「公」とは何か問われる時代になっている。

僕たちはバブル崩壊の焼け跡から立ち上がり、コア（心臓部）建設に力を合わせた。今後は「失われた10年」の傷跡を癒し、新たな「公」（人間のネットワーク）作りに、力を注ぎたい。住民と行政、設計者が手を携えて作った幕張ベイトウン・コアが、「新時代の生涯教育施設」として、「21世紀の公民館」として、果たすべき役割は限りなくあると僕は思っている。

集会に参加された多くのベイトウン住民の皆さん、行政担当者の皆さん、意欲的な取り組みを見せられた設計・音響設計の担当者の皆さん、そして、ここでは名前を挙げられなかった多くの関係者の皆さん。本当にありがとうございました。今後とも、「幕張ベイト

ウン・コア」へのご支援をよろしく申し上げます。

コンサートピアノを求めて

隅山 雄介（グランパティオス公園西の街、ピアノ選定委員会事務局長）

コアに関わるきっかけ

ベイトウン居住前からコンサートホールを含むコア施設と施設検討への住民参加に強い興味を持っていた。県財政悪化に伴う計画縮小を聞き愕然としたものの、音楽対応小ホールは残るとのことでホールのピアノが気になり始めた。国内ホールのピアノ選びが画的であることへ疑問から、住民参加のコアだからこそ異なる方向性を打ち出せるのではないかと期待をもった。

また、国内外のピアノを知っている自分なら、予算が少ないなりに日本で知られていない安く質のよいピアノの紹介をすることもできる。そこで、まずは状況を知りたいとコア研にメールを送ったところ、いつのまにやらピアノ選定委員会事務局長なる役職を与えられてしまった。

ホールには“きらりと光る”要素として専用音楽ホール並の音響特性を持たせ、しかも多目的使用に配慮される事となった。小ホールであることと街での演奏会実績からピアノ演奏がその想定を中心におかれたようだ。ホールの仕様が決めれば、次はホールの顔となるピアノである。住民要望としてのピアノ候補をあげるにあたり、街内外の多くの方からご意見をお伺いすると共に、各代理店を回りあらゆるメーカーのピアノを弾いて回った。

チャリティコンサートの開催

設計や管理担当の実務者会議で要望をあげた。しかし、ピアノを購入する市はコアを単なる公民館としており、「公民館の備品はあくまでアップライトピアノ。コンサートピアノなどあり得ない」という姿勢であった。

その会議後、設計の高谷先生から提案があった。お願いするだけではなく住民自らが動いてチャリティコンサートをしてはどうかという。正直、ピアノを購入

する費用が集まるとは思えず、また魅力のあるコンサートの中身とスタッフを集められるかどうか不安もあった。しかしコア研としてこの提案を受け、多くの方々の力が結集されることとなった。

住民の手による、ベイタウンならではのチャリティコンサートが3回開催され、いずれも大成功であった。ピアノを買う費用を住民自ら集めるという異例な活動は、千葉市のみならず文部科学省にも注目されることとなり、予算獲得への大きな力となった（はずである）。また、素人である我々がコンサート運営のノウハウや人脈を得るまたとない機会となった。ここで得た資産は後につながっていくこととなるだろう。

一流ピアノを入れるウルトラC

ピアノに話を戻そう。その後市担当者へのプレゼンで要望を再提示した。有名ピアノは価格も高く定価1500万円の8割程度が目安。市はアップライト路線から脱却こそしたが、そんな予算がつく見込みはない。しかし“コンサートグレード”のピアノはホールの仕様に合わせるために譲れない。可能な限りの手を尽くした。

安く入れるため並行輸入等を検討したが、市の物品購入方法ではそれも難しい。いわゆる世界三大ピアノは正規では割引が少なく不可能という結論になる。残

る一流ピアノ・ファツィオリの正規総代理店と折衝を続けた。社長と直談判して東日本初の公共ホール導入を含んでいただき、「新古品なら」ということで通常あり得ない好条件を取り付けた。公共ホールの新古品購入は異例だが、世界一流と低予算をクリアできるこれ以上はない最高難度の技である。これなら市側に納得してもらえるかもしれない！このウルトラCを引き出したところまでで私の仕事はほぼ終わった。あとは市側の判断である。

想いは叶ったか？

果たして、ウルトラCが受け入れられ我々のコアにコンサートピアノ導入が決定したのか？予算獲得が不十分でさらなる購入資金獲得の手段を講じることになったのか？あるいは国産廉価ピアノが入ったのか？残念ながらこの原稿を書いている時点では未定であり、ウルトラCの成功を期待するばかりである。

末筆ながら、様々にご協力・ご助言いただいたコア設計担当の高谷先生、音響を担当された永田音響設計の福地先生、チャリティコンサートにご協力いただいた皆様、ご助言いただいた音楽・楽器関係の皆様、ベイタウン中年バンドの皆様、コア研スタッフ、ピアノ選定委員他ピアノ導入にご協力いただいた全ての皆様に御礼申し上げたい。